

自縛と解放の智慧

——本願の教えに聞く——

本学教授 延塚知道

今年度の大谷学会は、「閉塞感と宗教的知」という大きなテーマの下で話しをせよということでありました。私は、親鸞聖人に教えを聞く者として、このテーマをどう考えるかということ、「自縛」、ちょっと難しい字ですけれども、自らを縛る、自分で自分に縛られていく、そこに今日のテーマの閉塞感という問題を見たいのです。その自縛という閉塞感から、どんなふうに解放されていくのかを親鸞聖人の仏教に尋ねてみたいと思って、こういうテーマを出させていただきました。

現実の問題をどういう視点から考えたらいいか、どういふところに現実の問題を見ていく方向があるのか、それを尋ねてみたいと思いますので、私の方は少し原理的なお話になるかもしれませんが。玄侷先生の方はたぶん今具体的に福島でご苦労をなさっておられるわけですから、現実的なお話になると思いますので、二つ合わせてお考えくださいければ幸であると思っております。

この「閉塞感」という言葉があらわしますように、我々は毎日テレビ等でいろいろな報道を見ておりますが、そう

という言葉がびったりくるような現状があります。政治を見ても、どちらに向かって日本を引っ張っていかうとしているのか、日本という国をそもそもどういう国にしたいのか、よくわからない状況の中で原発を稼働するとかしないとか、そういう議論に終始しているわけです。根源的な問題から眼をそむけて、モグラたたきのように現状に対処しているだけです。それは、政治だけではなくて経済、文化、教育、科学等、どの分野においても例外ではなく、先が見えない不安にかられます。何だか私たちは、たくさんの解けない問題を抱え込んでしまっているように思えて仕方がないのです。それが閉塞感という言葉で、言おうとする内容ではないでしょうか。

一、二例をあげてみたいと思います。私たちは二十世紀になって二度の世界大戦を起こしてしまいました。二度の大戦でお亡くなりになった方は、六千万人を超えると伝えられています。一九四〇年の日本の人口を見ても、七千万人ちょっとなのです。ですから二度の大戦で日本人の総人口の八割以上の方が世界中で亡くなったわけです。もちろんそれぞれの方にたくさんご家族がいたはずですから、世界中の人が二度と戦争を起さずにはいけないということを中心に誓ったはずで、日本もご存じのように原爆が投下されて、二度と戦争を起さずにはいけないと、憲法九条を設けて、国として戦争の放棄を掲げました。それは世界中の人がそう誓ったはずで、それ以降もたくさんの会議が持たれ国際連合がつくられて、戦争を超えていく努力を世界中の人がやってきているわけです。ところが、戦争がなくなった日は一日もありません。最近のアメリカの動向などを見ておきますと、「民主化」とか「国際平和」という大義名分のもとで新しい戦争を起していると思えます。ですから人間は、戦争はだめだということは誰もわかっていて、一生懸命戦争を超えようという努力をしているけれども、その努力がまた戦争を生んでいる。そうやっていくと、いったいどういふうにそれを超えていくのか、世界人類のたいへん難しい問題ではないかと思うわけです。

もう一つ例をあげてみましょう。日本の近代、近代の定義はいろいろありますけれども、ここでは明治以降と考えましょう。明治以降、日本の近代化を牽引してきたのは、日本だけではないと思いますが、やはり科学主義だと思います。

十年ほど前だったと思いますが、私、中国にまいりまして人民大会堂で当時の江沢民さんの演説を聞いたことがありました。江沢民さんは、日本の福沢諭吉さんと全く同じことを言っておられました。ああ中国はこれから近代化を進めようとしているのかと思って、何とも言えない複雑な思いを持ちました。なぜかと申しますと、近代化は、私どもに確かに豊かさを恵んだ反面、人類滅亡の危機ともいえる負の課題を残したわけです。

私は昭和二十三年の生まれで、直接は戦争を知りませんが、まだ戦争の名残があったころです。日本全体が貧しかったわけですから、我々も今日お集まりの方たちも、一生懸命働いてきたわけです。そのころから見るとずいぶん豊かになったと思います。私どもが子どものころには自転車しかありませんでしたが、オートバイになり、車になり、飛行機ができ、新幹線ができて、これからリアモーターカーができるという時代になりました。経済的にもずいぶん豊かになりましたから、豊かさ、快適さ、便利さ、そういうものを確かに科学主義は恵んでくれたのだと思います。

しかしその反面、CO₂の排出のためにオゾン層が破壊されて、地球全体が温暖化し、地球環境の破壊が進んでいます。さらには世界中の緑がなくなって砂漠化していく、食料危機の問題がすぐそこまで来ていますし、地球環境が死ねば、そこにいる人間も死ぬのです。科学主義は、そういうさまざまな負の課題を生んでいると思われまます。言うまでもないことですけれども、科学によって原爆をつくり、地球が何個あっても足りないほどの数を、今世界は保有しているわけです。人類が精いっぱい考えて、良かれと思うことに努力してきた。原爆も日本に投下されて、あれだけ

悲惨な状況を生んだわけですから、世界中の人が原爆を戦争に使ってはいけない、しかし平和利用ならいいだろうと考えて、原子力発電所を世界中に四百基以上もつくったわけですよ。

先ほどのご挨拶にもありましたように、今回の大震災で、もちろん震災の大きさ、そして被害を受けられた方々に対して誰もが辛い思いを持ちました。けれどもいまだに私たちの両肩にずっしりとのしかかって解けない問題が、原発の問題ではないでしょうか。そうすると人間はいろいろなかたちで良かれと思ってきたことに努力を重ねてきましたけれども、まるで天に向かつてつばを吐いているように、それが人類の破滅に至りかねないような重さとして、かえって我々の両肩にのしかかってきています。一体こういう問題をどう考えたらいいのか、どこで突破していったらいいのか、それが現代の世界の人類が抱えている問題ではないかと思えます。

時間がございませんので、たまたま二つのことを申しあげましたが、人類が解けない問題は戦争と科学主義だけではないと思います。あらゆる分野で、人間がやることに始末に負えないようなかたちで人類全体に降りかかってきている。こういう課題をどこで突破していくのかということですね。私は先ほど申しあげましたように、親鸞聖人の仏教を学ばせていただいている者ですから、今のような問題をどう考えたらいいのかということについて、少し思うところを述べさせていただきますということです。

仏教が世界の思想と違う特質は、一言で言うところ「内観道」ということです。私たち人間は、気がついたときにはもう人間になっています。おそらく皆さんの記憶にあるのは、早い方でも四〜五歳ぐらいからではないでしょうか。幼稚園か小学校一年生ぐらいの記憶だと思います。気がついたときには私たちは人間になっていますので、人間そのものは問えないために、人間を大前提にしています。自分を前提にして、外に目が向いていて自分の外側を考えていく、それが人間の普通の考え方ではないかと思えます。日常的なことと言いますと、人の悪口はよく言いますけれど

も、自分のことはよくわかっていないというようなことだと思っています。

世界中の人間の考え方は目が外に向いていますから、人間を前提にして自分の都合に合わせて外側のことを考えていこうとします。たとえば非常に基本的なお話で皆さんご迷惑かもしれませんが、仏教では、人間の課題を「生老病死の苦を超える」と教えます。普通の考え方では、できるだけ歳を取らないように若くありたい。できるだけ病気をせずに、健康で長生きしたいと考えるわけです。私たちが子どものころには、私はよく覚えておりますけれども、還暦のおじいちゃんといったらもう年寄りでした。腰が曲がっておられました。今六十歳といったら、まだお若いでしょう。私は六十四歳になりましたが、まだ腰は曲がっていません。それから、平均寿命が男女共に、今では八十歳を越えているのです。そんなふうには日本全体が私たちの考え方の通りに進んできたのでしょうか。人間の考え方がそうだからでしょう。できるだけ若く健康で、できたら死なないように、臓器移植をするわけです。しかし臓器移植をしても必ず死にます。人間の死亡率は一〇〇%ですから。人間を問わないで、自分の都合に合わせて外側に向かって努力していく。これが私たちの普通の考え方です、それを「外道^{げいどう}」といいます。

「外道」とは、今はあまりいい言葉の響きではありませんが、決して悪い意味ではなくて、私たちの考える範疇をあらわす言葉です。人間は自分のことを問えない、だから自分の都合に合わせて外に向かって発想していく考え方がす。そういう考え方を「外道」というわけです。目は世界中見えますけれども、自分の眼だけは見えないように、どんなに力が強い巨人でも、自分の体だけは持ちあげられないのと同じように、人間は自分自身を問いきくことはできないわけです。自我によって自我全体に、丸ごと目覚めるなんていうことは不可能です。

ところがお釈迦様の仏教は、先ほど申しましたように外に向かつて考えていく考え方は、生老病死の「苦」から自由になることができないわけです。臓器移植をしても死ぬのですから。だから生老病死を「苦」だと思ふ人間とは

何か。外道が外側の環境を問題にすることから言えば、仏教は、主体そのものを問題にしていくという方向を持つています。そしてなぜ生老病死を「苦」と思うのか、「苦」と感じるのか。私は、犬や猫に聞いたことはありませんが、生老病死を「苦」と思うのはおそらく人間だけです。人間だけが持っている特徴ですから、人間そのことを「内」に問うていって「苦」の原因を突き止め、「苦」から解放されていく、それがお釈迦様の仏教です。そういう意味で仏教は、私たちの普通の考え方と反対の方向を持つていると考えてもいいと思います。私たちの普通の考え方が「外道」というのに対して、仏教が「内観道」といわれるのは、内に向かって主体の方を尋ねるからです。内に人間を問うて、人間の言葉も自我も超えた「覚り」にまで突き抜けて、そこから人間を見ようとしている。それが仏道・仏教とお考えいただけます。

なぜ仏陀にそういうことができたのか、わかりません。お釈迦様は「覚者」、「仏陀」です。人間を内に超えて、人間を超えた覚りの智慧によつて人間を見直していく、そういう智慧を持った方がお釈迦様です。ですから仏教は、今申しましたように「内」に人間を問い、「苦」がどこから生まれているのか。その「苦」のもとを探つて、人間の意識よりもっと深い本能的な自己執着にその原因を突き止めるのです。その自己執着を超えた覚りによつて、「自分」というとらわれから解放していく。全ての人間に自我を超えるものになって苦を超えてほしいと、お釈迦様がたくさんの経典を説いているのです。

普通「苦」の原因は外にあると考えますから、たとえば今の学生さんのように、寂しくなると彼女のところに行ったり、友達みんなで酒を飲みに行つて、ワーワー騒いで盛り上がつて帰ってくる。しかし、しばらくするとまた寂しくなるわけです。そんなことをいくらやっても寂しいのは死ぬまで変わらない。ですからその寂しさは人間の内の問題なのです。しかし、人間にはそれがわからないために一生懸命外側から、それを埋めようと思うわけです。そのよ

うに生老病死を「苦」と思うのは人間だけだとしたら、人間の内側の問題としてあるわけです。生老病死を都合が悪く考えるのは、人間だけですが、その都合の方に苦の原因があることを教えるのが仏教です。それが本当に分かれれば、人間は自分のとらわれから、自由を得ることができる。そういう道を恵もうとするのが仏道・仏教だと思えます。要するに、生老病死の制約の中であって、その制約にとられない自由な主体になること、それが仏道です。

私の師であり、本学の学長でありました松原祐善先生は、癌でお亡くなりになりましたが、本物の念仏者でした。癌を宣告されたとき、「今日から点滴も薬もいりません。家で死にます」と仰って、さっさと歩いて帰られました。末期癌の激痛の中で念仏を称えながら、「痛いのも私が頂いた物です」と、輝くようなお顔をしておられました。「癌も頂いたものです。生きることも頂いたものですが、死もまた頂いたものです」と仰って、念仏の声が消えるように浄土にお還りになりました。生老病死の苦を超えるとはこういうことか、見ただけで分かりました。一切の制約の中であって、死からも自由な主体になること、それが本物の仏者です。

ところが親鸞は、今申しあげましたような、内に超えて覚りを覚っていくという道に比叡山で二十年近く苦勞なさるわけですけれども、皆さんご存知の通り、それに断念して比叡山から下りてこられました。そして法然上人の「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という、一生がひっくり返るような真実の教えに遇うわけです。私たちもそうですが、人間は何か事があると頑張ってクリアしていこうとしか考えないですよ。できてもできなくても努力して頑張ろう、それ以外にないわけです。ですから親鸞聖人はおそらく二十年近く比叡山で、内に超えようという努力をなさったのだと思います。ところが法然上人の教えは、「ただ念仏して、弥陀にたすけられなさい」と教えるわけです。何があっても私たちは努力して頑張るほかにないわけですから、「たすけられなさい」という全く逆の方向の教えに遇うのです。そして皆さんご存知の通りですが、

いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

〔真宗聖典〕 六二七頁

と、答えられます。どんなに努力を重ねても、人間のすることは一切が自我に汚れているのだから、地獄の苦しみは当然である。地獄こそ自分の決定的なすみかであると、苦の原因を教えられ、それを丸ごと引き受けていく自由な主体になったのです。一切を地獄だと引き受けられるほど、自由なことはいずれでしょう。つまりどんなに人間が自力を尽くしたとしても人間には救いはない、そういう仏様からの覚りの眼差しに遇うわけです。ご自身が覚りを覚ったわけではないのですが、真実の教えによって、仏の覚りの方から見られていた自身を自己として、全ての制約を引き受ける自由な主体になったのです。

親鸞聖人の『歎異抄』をご存知ですね。あの『歎異抄』のいわゆる後序ごじょに親鸞聖人が常に語っておられた有名なお言葉が二つ掲げられています。

一つは、『大無量寿経』に説かれている弥陀の本願についてのお言葉ですが、こういう言葉です。

「弥陀じつたの五劫ごこう思惟しゆいの願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞いんねん一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

〔真宗聖典〕 六四〇頁

阿弥陀如来が五劫もの間思惟して建ててくださった本願をよくよく憶うてみると、救われない私一人のためであった。だから世界中の自力に汚れた人々を救おうとして建てられた本願が、どれほどありがたいか、という意味でしょう。「本願」とは、『大無量寿経』の中に説かれている教えですが、言葉を超えたお釈迦様の覚りを、私たちにわかる言葉にまでしてくださったと考えるとよいと思います。言葉を超えた覚りを言葉にするとするのは、お釈迦様の最初の説法と同じですね。お釈迦様は覚りを覚ったときに、「覚りは言葉を超えているから説法しても誰もわからないだろう」と思われて、一ヶ月ほど法を説かなかったのです。けれども「言葉や分別が間に合わなくなって苦しんでいる

人がいる。頼むから、教えを説いてほしい」という梵天かんじょうの勧請かんじょうによって、仏陀であったお釈迦様がそこから立ち上がり、教えを説く釈迦如来になったのです。それと同じように『大無量寿経』は、阿弥陀仏の覚りの方から「本願」の教えにまでなつて、私たちに法を伝えようとしてくださった。その大悲のご苦勞は私一人のためであった。「五劫」とは永遠の時間という意味ですが、永遠の時間をかけて覚りを言葉にまでしてくださったのは、自力では救われない私一人のためであったと、こういう意味のお言葉です。難しいですか。わかりますよね。つまりはつきり言うくと、親鸞聖人は、阿弥陀仏の覚りは人間を自力では絶対に救われないものと見た、こう仰っているのです。

私たちは努力すれば救われると思っっています。私たちが子どものころは、科学が発達して良い時代がくるだろうと信じていました。『鉄腕アトム』を見て空を飛べようになると、私はまともにそう思っていました。人間は、努力すればきつと素晴らしい世の中がくると思い、それを目標に努力してきたわけですが、仏様の眼差しから見ると「人間は人間の方で絶対に救われない」と見ていると親鸞聖人が仰るわけです。

私たちの方からはわかりませんが、仏様の覚りだけはそう見ている。どうぞ考えてみてください。もう一度、申しあげましょうか。私たち人間は、自分自身を立派なものだと思ひ、努力すれば救われる、きつといい世界がくると夢を見ていますけれども、先ほど我々の現実を申しあげましたように、自力では絶対に救われないと、仏様の覚りの方が見抜いているのです。それが他力の教えです。親鸞が覚りを覚つたのではないのですが、覚りの智慧に人間の全体を教えられ、確かに覚りの世界があると感得したのです。そしてその覚りの世界である浄土に生まれて往きたいという願いを生きようとするのです。凡夫のままでも隠すことのない願生浄土の仏道に立つのです。そのように、念仏して浄土に生まれて往く者になりなさいと説くのが、『大無量寿経』の教えです。法然上人はそれを一言で、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」、弥陀の本願に我々の全体が何者であるかを教えられよ。自力そのもの

が迷いであり、苦しみのもとであると思われている仏様の智慧が輝いている、それが念仏なのだ、こう仰っていることになります。南無阿彌陀仏は法そのものの名告りですから、念仏の方が人間の本性を見抜いている。その念仏に頭が下がったとき、自我の制約の全てを引き受ける自由な主体となるのです。言おうとすることはわかるでしょう。もう一つ大切な言葉が掲げられています。これも皆さんよくご存じだと思いますが、たいへん有名な言葉ですね。

「善悪のふたつ総じてもつて存せざるなり。そのゆえは、如来の御ころによしとおぼしめすほどにしりとおしらばこそ、あしさをしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめ、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

〔真宗聖典〕 六四〇～六四一頁

『歎異抄』の言葉は、皆さん覚えてください。分かっても分からなくてもいいのです。どうせ分かっても、自分の都合のいいようにしか分かりません。人間の頭なんてたいしたことありませんから。分からなくても身につくぐらゐに覚えておくと、人生につまずいたときに向こうの方から呼びかけてきますから。それが本当の生きた仏教になります。理解するなんていうのは、たいしたことではありません。

今親鸞聖人のお言葉を申しあげましたように、善とか悪とか私たちはいつも言い合って生きていますね。良かれと思ふことをやってきたのが、人間です。自分を中心にして良いこと・悪いこと、優れたもの・劣ったもの、いつもこういうことで悩みませんか。私などは劣等感の塊でしたから、いつもそれで悩み苦しんでいます。しかしそれは、いつの間にかできあがっている私を中心にして、良いか悪いかというだけの話です。

人は育つた環境によつていろいろ考え方が変わるでしょう。大学でこんなことを言つてはいけませんかね。ときどき夫婦喧嘩をしますが、うちの家内は北陸の生まれなのです。私は九州ですから、食べ物から違います。九州は「こ

うじ」の文化がありません。北陸は「かぶらずし」とか、滋賀県の「ふなずし」とか、ああいうものが大好きなのですね。九州人から見たら、あれは腐っているのです。だから「そんなものよう食べるなあ」と、たつたその一言で大喧嘩になります。育った環境が違うだけの話で、真理に適っているかどうかという高尚な喧嘩は、一度もしたことがありません。

そういうことですよ。人間はいつも善し悪しを言い合っているけれども、真理に適うほど善し悪しを知らない。いつも自分を前提にして自分のところから考えていく、それは真理にはならないのだと。

「善悪のふたつ総じてもつて存知せざるなり。そのゆえは、如来の御ころによしとおほしめすほどにしりとおしならばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおほしめすほどにしりとおしならばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

人間は自分自身を前提にして善し悪しを言い合って苦しんでいる、その全体を見抜いている仏様の智慧は、善し悪しという相対的な考え方を超えて、「一如」、我々が考え分別する以前にある「一如」の事実から、人間は実に愚かだと見抜いてくださっている。だから「一如」の浄土に生まれよと、勧めるのです。

先ほど玄侑先生にお聞きしたのですけれども、プルトニウムは今自然界にはないのですよね。それを我々の手でつくってしまったわけです。半減期が二万四千年です。今のプルトニウムを地中に埋めて、十万年はゼロにならないのです。十万年というと、まだ人類が生まれていないのですよ。ピテカントロプスが誕生したころです。そんな先まで、私たちは責任が取れないですよ。そういう愚かなことをやってしまったわけです。そして戦争は、欲望と欲望がむき出しになってお互いに殺し合いをやるのだから、その兵器として使ってはいけない。広島、長崎の原爆で世界大

戦が終わったのですから、世界中の誰もがそう考えます。しかし人間は、平和利用ならいいだろうと原発をつくったわけです。しかし、私たちが平和と言う場合に、何を望んで来たのでしょうか。結局、豊かで、快適に、便利に、そんなことしか出てこないじゃないですか。平和と言っても、それは欲望の塊ではないですか。戦争も欲望の塊なら、平和も欲望の塊なのだから、原発だって一端事故が起これば、戦争と同じことになるのです。人間は、戦争はいけないうが平和のためなら善いと思えません。しかし人間そのことを仏様の覚りだけが見抜いて、「罪悪深重煩惱熾盛の衆生よ」と呼びかけてくださっている。念仏をして「一如」の真実に生まれよ、浄土に生まれよと、人間全体に呼びかけている。それが『大無量寿経』の教えなのです。だから親鸞聖人は、覚りを覚ったわけではありませぬ。覚りの方から本当の人間の姿を教えられて、覚りの世界を確かに信じたのです。それが他力の仏教です。

戦後私たちは、豊かで快適に便利にということ求めてきて、どこにも救いはなかった。本当はそんなものを求めているのではないのです。本当に求めているのは浄土なのだと、お釈迦様は教えています。豊かさ・快適さ・便利さ、そんなものを求め続けて、結局人類の破滅に向かっているのです。そうではない、人類は本当は浄土を求めているのだ。人間には、本当に何を求めているかさえ、わかっているのですよ。教えられないとわからないのです。そう思いませんか。皆さん、私よりもお歳の上の方がたくさんおられますけれども、何を目標に生きてこられたのでしょうか。改めて聞かれると難しいでしょう。昨日、一昨日、私は九州でお話しております、「何を求めて生きてこられたのですか」と問うたら黙っておられるので、「質問が悪いですかね、どうなったら死ぬますか」と聞いたなら、「息が止まったら」と答えたおばあちゃんがいて、あれは参りましたね。「そうですね」と言ってお笑っていたのですけれども、どうなったら死ぬるのでしょね。何を求めているのでしょうか。人間には、それさえわかっていないのです。学生に問うと、すぐ「幸せを求めている」と答えます。そこまではだいたい同じです。「それでは、どうなつた

ら幸せになるのですか」と聞いたら、意見がバラバラになってきます。そして最後には、わからないという話になります。お釈迦様の覚りは、浄土に生まれることなのだ、私たちが本当に求めているものを教えています。

浄土とはどんな世界かを、簡単に申しあげましょう。『阿弥陀経』の中に、「赤い蓮は、赤い光を出す。白い蓮は、白い光を出す。青は青、黄色は黄色」それぞれが輝いている。私を中心にするという分別が破られた「一如の世界」ですから、私たちの比べるということが破られて、比べる必要がない世界です。比べる必要がないほど平等で自由なことはありません。浄土に生まれるとは、青は赤をうらやむことがない、白は黄色をうらやむことがない。要するにそのまま十分だと言えるものになりなさい。良いことも悪いことも、どちらも引き受けていけるような者になりなさい。人と比べなくてもいいという者になりなさい。それが「一如の浄土の働き」です。そこに先ほど申しあげましたように自分を中心にして比べて悩んでいく、それは結局自分で自分にとらわれているだけですが、それを破って行くような仏様の教えに遇うて、「念仏をして浄土に生まれよ、そこにしか救いはない」とお釈迦様が呼びかけておられることを、一度考えてみてください。

もう一つ、浄土と言うとすぐに頭に浮かぶのは、

同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。(『真宗聖典』二八二頁)
 という良い言葉があります。曇鸞の『浄土論註』の言葉です。念仏する者は、私だけというのではなくてみんな平等、命が響き合っている、そういう関係を取り戻すことです。自分だけ良かったらと誰でも思いますけれども、そう思つて暗い顔になつてしまふわけです。

私はこの歳になつたら死にかけかなあと思うのですけれども、桜がパァッと咲いているのを見て、この間感激しました。下を見ると、桜の根元の緑の中にパツと紫のすみれが咲いていたのです。それでああと思つて何か嬉しくなっ

てくるというか、うまく表現できませんけれども、命が喜んでいるような感激が突き上げてきました。五百円拾って嬉しいというのと違う、命が喜んでいそうな嬉しき、そういうものを最近感じるようになって、あかんこれは死にかけだなあと思いましたけれども。そんなふうになんたがついているという世界を、人間は本当に求めているのだとお釈迦様の覚りがそう教えているのです。私たちに分かるうが分かるまいが、念仏してそういう者になれ、浄土に生まれよと教えているわけですね。そうすると人間を

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなし」と見る、お釈迦様の覚りの眼差しは正しいと思いませんか。親鸞聖人は、それにその通りであります。『大経』のお釈迦様の覚りに見られていた通りでありますと、頭を下げられて謙虚に「愚禿」と名告って生きられました。「人間は万物の霊長だ」、そんなことを言わないで、頭を下げた謙虚に生きられた。そしてどんな方とも交わっていかうという願いを生きたのです。仏様に照らされたとしても、人間をやめるわけにはいかなないのでできるだけ謙虚に、あらゆる命と共にあるのだということを教えられながら、謙虚に生きていこうという願いに生きたのです、願生浄土、それが親鸞聖人の仏道です。そこに、人間が自我をも超えて仏ぶつになつていくような歩みが実現しているのです。

親鸞聖人は決して覚りを覚った仏教者ではありません。たくさんの仏教者の中でたった一人、最後まで覚りを覚らなかった仏教者かもしれません。しかし、人間に目覚め人間を超える世界に生まれたいと願って、生涯謙虚に、そして生きとし生けるものとながつているということを憶いながら念仏していった仏教者でありました。ですから私たちは、親鸞聖人の人間に目覚めた眼差しから、もう一度現実の人間を考えなければならぬのではないかと思うのです。

まだいろいろと思うことはありますけれども、時間がきてしまいました。どうもありがとうございました。

〈キーワード〉内観道、他力、浄土